

Title	Dear Nobody における母性の問題をめぐって
Author(s)	松本, 祐子
Citation	聖学院大学論叢, 14(2): 155-165
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=209
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

*Dear Nobody*における母性の問題をめぐって

松本 祐子

The Analysis of Motherhood in *Dear Nobody*

Yuko MATSUMOTO

Berlie Doherty's *Dear Nobody*, whose theme is a teenage pregnancy, reminds us of the fragility of the relationship between parents and children in modern society. The story is mainly narrated by Chris, an eighteen-year-old boy; at the same time, however, his girlfriend Helen's letters to her unborn baby, whom she calls Nobody, are frequently inserted. This double structure of the narration clarifies the difference of the attitudes toward pregnancy between a boy and a girl. Helen cannot escape from her pregnancy because the cause of the trouble is in her own body, and she must struggle alone and desperately; while Chris can hardly feel that he is the father of a new life and is petrified as if he were just a bystander.

Helen tries to deny the existence of Nobody and implores it to go away at first, but the fact that she writes many letters beginning with "Dear Nobody" suggests that she unconsciously accepts Nobody as a person even while she is anxious to get rid of it. It is not easy for a young woman, who is enjoying the joys of youth and can be as free and selfish as she likes, to become a mother required to sacrifice herself for her child as a matter of course. Although there is no idealistic mother in *Dear Nobody*, through childbirth the women almost instinctively get a sense of solidarity and begin to tell their own secrets. By sharing secrets, Helen finally recovers the lost bond with her mother.

Compared with the mothers, the fathers in this novel seem rather unimpressive and pitiful because it is more difficult for men to be sure they are the parents of a child. Helen gives up her dream because of pregnancy while Chris loses nothing; this situation appears to be very unfair at first, but in reality it turns out that Chris is so poor as to be driven away from Helen and her child in spite of the fact that he is a father. Doherty dares to break the traditional concept of family and attempts to suggest the significance of being a mother and a father in the modern world.

Key words; Teenage Pregnancy, Motherhood, Berlie Doherty

Dear Nobody tells the young readers that all mothers used to be daughters and that all people have their own story. To love one's child is to love oneself and also to love one's parents. Anybody used to be "Nobody" in his/her mother; therefore, *Dear Nobody* is a message to everyone in the world.

自分は望まれてこの世に生まれてきたのかどうか⁽¹⁾ それは多かれ少なかれ、誰もが意識せずにはいられない問題であり、その答次第で、人の一生は大きく左右されることになるかもしれない。自分が「望まれない子ども」であったことが判明して、平然としていられる人間は、ほとんど皆無であると言っていいだろう。だが、その同じ人間が、自らの（あるいはパートナーの）妊娠という事態に至った時、それぞれの事情により、必ずしも手放して喜ぶことができず、その子を産むべきかどうか思い悩み、取るべき道を選択するという手続きを踏む。人は、自分に生命を与えてくれるはずの親に、存在そのものを否定され、抹殺される可能性もあるのだという事実から目を逸らすことはできない。

十代の妊娠をテーマにしたBerlie Doherty (1943-) の*Dear Nobody* (1991) は、現代社会における親子関係の危うさ、脆さを否応なく意識させられる作品である。子捨て、子殺しは許すべからざる罪であり、グリム童話の「ヘンゼルとグレーテル」「白雪姫」等で、子どもを虐げる残酷な親が実母から継母に書き換えられていることはよく知られているが、自分の中に宿った命を、侵入者、邪魔者、エーリアンとして嫌悪を抱く「母」は、現実社会の中で、決して珍しい存在ではない。自分の中の新しい生命に対する憎悪や殺意は、ごく当たり前の日常の中で、誰にでも起こりうる衝動であることを*Dear Nobody*は気づかせてくれるのである。

物語は高校卒業を目前にした十八歳の少年クリスの一人称で語られるが、それと交互に、もう一人の主人公であるクリスの恋人ヘレンが、自らの中に芽生えてしまった新しい命Nobodyに宛てて書いた手紙が挿入される形の二重構造になっている。二つの視点から物語を描くこの独特の形式を採用するに至った経緯について、著者Dohertyは次のように語っている。

From the very beginning I thought I want this to be about how it (a teenage pregnancy) affects the boy, and I thought it would just be about Chris. I started it in the first person as Chris's story, and I thought this isn't going to work because I can't exclude Helen because she's the one who's going to have the baby. Then I started to write it in the third person and that didn't work either because I'd lost Chris then. So I went back inside Chris and then I hit on the idea of letting Helen speak out all her emotions, her anguish and loneliness into the letters she'd write to her unborn child. And so I was away then -- I knew what I was doing.⁽²⁾

試行錯誤の末にたどり着いた語りにおけるこの二重構造は、妊娠という問題をめぐる少年と少女の

意識の差を鮮やかに描き出すことに成功している。自らの肉体の中で、直接、起こりつつある変化ゆえ、妊娠という厳然たる事実の前に逃げ出すこともできず、孤独で絶望的な戦いを続けなければならぬ〈母親〉ヘレンに対して、〈父親〉であるクリスは、対等に責任を分かち合いたい気持ちがあったとしても、ほとんど実感を持つこともできず、まるで部外者のように無力に立ちすくむばかりなのである。

Dear Nobodyは、常に、母と子の関係性を様々なパターンの中でとらえながら、ストーリーが展開されていくという形をとっている。クリスとヘレンは、妊娠以前に、それぞれ、母親との関係について重大な問題を抱えている。自分たちの妊娠をきっかけとして、母親との関係を見つめ直し、母親を含めた身近な女たちの秘密に触れていくことになるのだが、この作品の中には、いわゆる理想的な母親像を見出すことはできない。夫と幼い息子たちを置き去りにして、愛人のもとへ走ったクリスの母にしても、抱きしめられたい娘を無条件に抱きしめてやれないヘレンの母にしても、よき母親のイメージからは程遠い存在である。さらにまた、彼女たちも自分の母親との関係に傷つき、満たされない思いに悩んでいたことが判明する。そこには、果てしなく続く罪と苦悩の連鎖が存在している。

そもそも、「よき母親」とは何なのだろうか？ 子どものために、すべてを犠牲にするのが当然であり、母であることがすべてに優先しなければならないものなのか？ 世間は常に母性を神聖視し、「母親」に対して過剰な期待を抱く傾向にある。その美しい幻想を壊してはならないという不文律が、重苦しいプレッシャーとなって、世の女たちを取り巻いているように思われる。母親である前に、一人のエゴイスティックな人間であることを選んだ女は、世間から「母親失格」の烙印を押されることになる。見捨てられた子どもたちは、とうてい、そうした母親の「罪」に寛大になることはできないが、それでも、自分をこの世に産み出してくれた存在を憎みきれず、喪失感に苛まれながら、母親を追い求めてしまうのである。

少年クリスと少女ヘレンを比較した場合、母親の罪に対して、より厳しい目を持つのは、同性のヘレンの方である。クリスは、八年も前に家族を捨てて男と出ていった母に、ロマンチックな幻想を抱いているが、ヘレンはその人からの手紙を読んだだけで、母親としての配慮の欠如を的確に見抜き、辛辣に批判し、クリスの幻想をことごとく打ち砕いていく。同じ年齢でありながら、明らかにヘレンの方が大人であることが示される。だが、もちろん、ヘレンにしても、完璧に自分をコントロールできるほど大人ではない。恋人クリスとの初めての性交渉で妊娠してしまうほど、幼く無防備な一面も持っている。それでも、母親の責任・義務の重大さに対して意識的であるからこそ、思いもよらなかった自らの妊娠に際して、一層、驚き慌てることになるのである。

十代の妊娠、それは多くの場合、精神的にはまだ子どもでありながら、肉体的には既に大人であるという、その年頃特有のアンバランスさを象徴するものであるように思われる。思いがけない「アクシデント」に見舞われた少女の恐怖と戸惑いは、あまりにも深刻で痛々しい。Dohertyは敢

えて、十代にありがちな無分別や軽はずみとは無縁の生真面目で才能豊かな優等生ヘレンをヒロインとして設定した。もしかしたら、自分は妊娠してしまったのではないかと気づいた時、ヘレンは自分の中にいるかもしれない未知の存在Nobodyに向かって手紙を書き始める。もちろん、このNobodyという呼びかけには、そこにいるはずのない者、いてはならない者という意味が込められており、最初の手紙は、“Leave me alone. I don't want you. Go away. Please, please, go away.” (p.47)⁽³⁾という言葉で締めくくられている。さらに妊娠の事実が確定的になるまで、ヘレンは必死にNobodyがそこにいないことを願いつづける。“You are an alien growth in me. You are a disease. I want you not to exist.” (pp. 62-63) とあるように、ヘレンにとって、Nobodyは肉体を蝕む恐ろしい侵略者、忌むべき病魔にしか感じられない。そして、ついにその実在が明らかになってしまった時、ヘレンはNobodyに対して、ストレートな殺意を抱くのである。それは、何の心の準備もなく恋人の子どもを身籠もってしまった女子高生の反応として、驚くべきものではないし、むしろ、ごく当たり前のものとさえ言ってもいいかもしれない。

Nobodyを抹殺するためにヘレンが最初に行った行動は、無理やり馬を走らせて、落馬することで、自然流産を目論むというものだった。より具体的で確実な堕胎手術ではなく、「事故」の結果としての流産を期待することは、胎児の生命を絶つことに対する罪悪感を少しでも軽減するためのある種の逃避行動であると同時に、自分の肉体を痛めつけ罰しようとする自虐的行為と考えることもできる。いずれにしても、女であるヘレンは、好むと好まざるにかかわらず、自分の心と体を傷つけずに問題を解決することはできないのである。

この命は否定されることから始まった。だが、間違いであってほしいと切実に願いながら、Dear Nobodyと呼びかけて手紙を書くという行為は、ヘレンが無意識のうちに、最初からその存在を一個の人格として認め、受け入れていることを暗示している。dearという形容詞は、手紙を書く相手に向けられた単なる形式的な意味合い以上の何かを伝えているように思えるのである。存在してほしい者に向けられた、呪詛さえ込められた呼び名であったNobodyは、幾度となく繰り返される対話の中で、いつしか、愛しい、名前のない者に対する愛称へと変化していく。

青春を謳歌し、未来を夢見ながら、何の疑いもなくエゴイスティックな存在でいられた身軽で自由な立場から、当然のように自己犠牲を強いられ、否応なく他者への責任を自覚させられる母親になることは、誰にとっても容易い経験ではない。それは何も、十代の未婚の母に限ったことではない。Dohertyは、三人の子を産み育て、離婚後、一人で立派に馬場を切り盛りするクリスの伯母ジルが、かつて、夫と別れた後に妊娠していることに気づき、誰にも言わず、その子を葬り去ったことを告白させている。自分の選択に百パーセントの確信があったと言うジルは、秘密をすべて自分一人で抱え込みながら、十五年経った今も、人知れず、墮胎した我が子の年齢を数えている。手術は呆気ないほど簡単で、まるで何事も起こらなかったかのようにだったのに、Nobodyは永遠に名前のないNobodyのまま終わってしまったのに、ジルはいつまでも、己の犯した罪を忘れ去ることが

できない。

ここで浮かび上がってくるのが、「秘密」(secret)というキーワードである。Dear Nobodyの中には、同性の学校友達の間で交わされるたわいのない打ち明け話から、人の出生にまつわる深刻な秘密まで、様々なレベルの「秘密」が描かれている。一般に、秘密の共有は人と人との結びつきを緊密にするものだ。例えば、ヘレンはこんなことを言っている。“I'm full of secrets. . . . I'll burst one day. Everyone tells me their secrets at school.” (p.89) ヘレンは親友ルスリンにたいていのことは打ち明けるが、クリスと初めて愛し合ったことは報告できても、その結果、妊娠してしまったことはどうしても言い出せない。ヘレンの母は気軽に打ち明け話をできるようなタイプではなく、ヘレンは、何でも話せる友達のような母親⁽⁴⁾を持つルスリンを羨ましいと思っている。親友に何でも打ち明けられる気楽な女学生だったヘレンは、妊娠という、ルスリンとは決して共有できない重大な秘密を抱えてしまった途端、それまでとは別の範疇に属する何かに変質してゆくのである。ヘレンは最初、その未知の何かに変質してゆくことを恐れ、抵抗し、もがき続ける。だが、妊娠中絶の手術台の上から逃げ出し、Nobodyを産むことを決意した後、何気ない日常の風景が今までとは違って見え始める。

It was three o'clock when I left the library. I walked to Chris's school, taking a shortcut through the park. It was full of young women with strollers. I've never seen so many strollers in my life before. The women all smiled at one another as they passed, as if there were some kind of conspiracy among them, as if they were members of a secret society. (p.110)

子どもを産むという共通の体験によって、見知らぬ女たちの間に仲間意識・連帯感が芽生えるらしいということをヘレンは発見するのである。妊娠八ヶ月になり、誰の目にも妊婦であることが明らかになった時、ヘレンは自分自身が“a secret society”の一員であることをはっきり自覚させられる体験をする。バスの中で突然、赤ん坊が泣き出し、どうしても泣きやませることができずに、他の乗客の颯々を買ひ、途中のバス停で降りざるを得なくなった若い母親は、手を貸してくれたヘレンに“a real sharing, hopeless, pitying sort of look” (p.196) を向ける。一緒にいたルスリンは、手に負えない赤ん坊の騒々しさに呆れ、“Yours won't be like that, Helen” (p.196) と囁くが、その時、ヘレンは、自分とルスリンが何マイルも遠くに隔たっているような気がする。親友ルスリンより、見ず知らずの若い母親の方を身近な存在に感じてしまうのだ。妊娠という女だけの共通体験は、見知らぬ者同士でさえ、本能的にある種の了解点に到達させることが可能であることが暗示されるのである。

そのことはもちろん、身近な人間関係にも多大な影響を及ぼすことになる。ヘレンの妊娠をきっかけとして、周囲の大人の女たちがそれぞれの封印された過去を語り始めるのである。ジルが我が

子を墮胎したことを告白したのは、絶望に駆られたヘレンが落馬を装って流産を図ろうとしたことに気づいたからだった。後にヘレンは、“she (Jill) was so much a part of my guilt and secrecy, and I was part of hers.” (p.187) と述べている。中絶を実行したジルと思いとどまったヘレンの間に、さほど大きな違いはない。二人は女として、同じ罪と秘密を分かち合っているのである。

秘密の共有はまた、ほとんど絶望的に思われたヘレンとその母アリスとの関係さえ修復することになる。アリスの出生にまつわるエピソードが明らかになる過程は、この作品の中で最も衝撃的なクライマックスと言っていいただろう。ヘレンが母親の秘められた過去を知り、思いもよらなかった母の素顔を「再発見」するくだりは、八年もの空白の後に、自分を捨てた母との再会を果たすクリスの物語より、はるかにドラマチックに感じられる。最も身近なはずの家族でありながら、ヘレンにとって、それほど母は遠い存在だったのである。ヘレンの「母親再発見」は、クリスの「母親探し」とは対照的な形で起こる。なぜなら、自分が母親になることを決意することによって、ヘレンは母親を永久に失うことを覚悟しなければならないからだ。ヘレンの妊娠に対して、生理的嫌悪とも言うべき激しい拒否反応を示す母は、あくまでNobodyの存在を認めようとせず、夫にも内緒で子どもを始末させようとする。病院の手術台から逃げ出し、子を産むことを選んだヘレンに背を向け、同じ家に住みながら、徹底的に対話を拒否するアリスは、読者にも、理不尽で残酷な母親という悪印象を与え続ける。ヘレンは常々、自分の家族がとても秘密主義であると感じていた。だが、ヘレンの妊娠がもはや秘密でなくなった時、家族の秘密の扉も開き始める。最初の鍵は祖母の言葉だった。孫のヘレンが未婚のまま妊娠したことを知ると、気難しい老女は、“There must be bad blood in our family. Like mother, like daughter.” (p.150) という謎めいた言葉をつぶやく。ヘレンは、祖母のこの発言を、自分と自分の母に対する非難と受け取った。ヘレンの妊娠を決して許そうとしない母。ずっと折り合いの悪い母と祖母。その理由のすべてが祖母のこの言葉の中に隠されていると感じる。

子どもはしばしば、親の無理解を嘆くが、多くの場合、子どもは親にも若い時代があったことを想像することができない。祖父の語る娘時代の母の姿は、意外にも、ヘレン自身と共通することの多いものだった。ヘレンの音楽の才能が父から譲り受けられたものであるように、ダンスへの情熱は母から受け継がれたものだったのだ。⁽⁵⁾ヘレンが祖母や母の過去を知りたくなったのは、それが自分の「今」につながるものだと感じたためと解釈することができる。母もまた、かつて私生児を産んだことがあるのではないかと、自分とその私生児なのではないかと思った時、ヘレンは思い切って母に質問をぶつける。

She said it was none of my business, and calm as anything, feeling that deep inside I was the same person as she was, just as you're the same person as I am, just as she is the same person as that quiet, sad old woman staring all day and all life out of a crack in her bedroom curtains, I told

her that I thought it *was* my business. (p.181)

ヘレンがNobodyを産むことを決意したのは、病院の手術台の上で、自分の体にしがみついているNobodyが、まるで自分自身であるかのように思えたからだった。つまり、Nobodyを拒絶することは、自分自身の存在を否定することになってしまうのである。妊娠をきっかけとして、ヘレンは自分を産んだ母、さらには、その母を産んだ祖母にまで思いを馳せる。よそよそしく得体の知れない祖母も、かつて自分が「秘密」の赤ん坊であり、子どもを産んだら解雇されるという雇い主との契約のため、両親によって、暗い抽斗の中に隠されていたことを話してくれる。その可哀想な赤ん坊はNobodyの未来の姿かもしれない。母の過去も、祖母の過去も、自分と無関係ではない。胎内に子を宿すヘレンは、はっきり、そう確信するのである。

ヘレンの質問に対する母の答は、ヘレンの想像していたものとは違っていた。“I was born out of wedlock, as they say. Born in sin. And I'll never forgive my mother for that.” (p.183) ヘレンは、自分がNobodyと同じ立場の赤ん坊だったのではないかと、即ち、母が結婚前に身籠もった子どもなのではないかと予想していたのだが、未婚の母の子として生まれたのは、実は、母アリスだったのだということがわかる。アリスは、彼女自身には何の責任もないことで罪の子の烙印を押され、世間から蔑まれ、自らの出生を呪い、自分を産んだ母を恨み、だからこそ、何よりも体面にこだわって生きてきた。ヘレンにも今はその理由がわかる。自分の娘が未婚のまま子どもを産むことに反対し続けるのは、世間体を気にする母親の立場からだけでなく、父のない子として、屈辱の中で生まれ育った立場から出た無理からぬ意見であったことが判明し、アリスの印象は劇的に変化する。ここに至って、ようやく母と娘の相互理解への道が開いていくことになるのだが、忘れてならないのは、ヘレンの選択が結果的にアリスにとって大きな救いになっているという点である。かつてNobodyであったアリスは、自分を産んだ母の姿をヘレンの中に見出すことになり、それによって、言わば、自分の娘にもう一度、産み直されることになるからだ。世間から罪の子、私生児と蔑まれ、自分自身によってさえ否定され続けた命が、娘ヘレンの決意によって肯定され、受け入れられ、愛されることで、アリスは間違いなく救われるのである。

様々な葛藤を経て、祖母、母、ヘレン、さらにエイミー (=Nobody) へと続く四代の女たちの物語の結末は、赦しと慈愛に満ちて美しい。

When I finished feeding Amy and was just about to put her down, all milky-sweet and sleepy, Mum came over and took her from me. She just kissed her, the way she does, and then she walked back across the room and put her in Nan's arms.

It was as though Amy were a fine thread being drawn through a garment, mending tears.
(p.232)

新しい生命を通して、二組の母と娘との間に静かな和解が成立する。これからも、罪と苦悩の連鎖が絶たれることはないとしても、痛みと苦しみと喜びを共有することで、母と娘の絆が再生される。誰もが最初はNobodyとして生まれ、それから、自分というアイデンティティを獲得し、それぞれの物語を生きるのだということを、彼女たちは心と体で実感するのである。

こうした女たちのドラマが熱く展開する一方で、*Dear Nobody*においては、主人公であるクリスも含め、男たちの存在感が妙に希薄なのはなぜなのだろうか？「人間は本能が壊れた生き物である」⁽⁶⁾と断言する精神分析学者・岸田秀は、「父親というものは人類の文化が発明したもので、父性本能なるものはもともと存在しない。母性本能は、遺伝的素質としては存在しているにしても、壊れてしまっており、人間の母親は母性本能にもとづいて子を育てるわけではない」、即ち、「人間の親の子育ての仕方、親子関係のあり方はすべて文化の産物である」と言っている。たとえ既に本能が失われ、壊れてしまっているとしても、女たちは自分の血と肉の中で、我が子との絆を実感することができるが、父親である男にはそれができないとすれば、それは何と情けなく、不公平なことだろう。

*Dear Nobody*に登場する父親たちは、自己中心的で、欠点だらけの母親たちに較べて、はるかに好ましい印象の男たちであると言える。このことについて、河合隼雄は次のように述べている。

「身体性」と言えば、ここに出てくる男達の「父性」にほとんど「身体性」が感じられないのも特徴的である。非常に興味深いのは、ヘレンの祖父、ヘレンの父、クリスの父、これらの人に共通に「母性」が感じられることである。彼らはうすうす現代における「母性の欠如」に気づいているので、意識的、無意識的に「母性」の役割を演じている。しかし、彼らは「体を張った」父性の強さを失っている。⁽⁷⁾

これらの父親たちは、多かれ少なかれ、母親の役割を放棄した妻たちの代わりに引き受けており、指摘されている通り、母性的要素が色濃く現れている。彼らの姿から感じられるのは、彼らが努力によって面倒見のよい父親になっているということだ。自己実現のために、子どもを捨て去った無責任で身勝手なクリスの母が、それでも、クリスに母親として認められていることを考えれば、多大なる努力にもかかわらず、印象の薄い父親たちが、何となく哀れに思えてくる。女たちの母親としての自信は、自分の胎内に十ヶ月間、子どもの存在を実感していたことから来る驕りとさえ感じられるのだ。生物学的な仕組みから言って、確かに、男は子どもの父親としての実感を持ちにくい生き物かもしれない。産みの母は無条件に母親でいられるが、父親は努力によって、父という身分を獲得しなければならない。そのことについては、実の父でも養父でも、大して差はないように思

われる。それが最も端的に現れているのは、ヘレンの大好きな祖父が、実は遺伝的な血のつながりのない義理の関係であったことが判明する場面であろう。ヘレンの祖父は、よき祖父であるために、少なからぬ努力をしているように見える。

Sometimes I think he's my best friend. When I was little, I used to save up all my sadnesses to tell him. He would sit me on a stool in the kitchen and crouch down in front of me and listen solemnly, all the way through. When I'd finished telling them, I felt better. It was just the fact that he took the time to listen, I think; took me seriously, even when I was only a few years old. (pp.56-57)

自分一人の世界に閉じこもってしまっている祖母、ヘレンと真剣に向き合うことを避けている母とは対照的に、ヘレンにとって、唯一の心の支えとも言うべき役割を担っている祖父が、遺伝的には他人であったという設定は、ある意味で、極めて象徴的である。

ヘレンの祖父の存在によって、たとえ義理の間柄であっても、努力次第でよい家族関係を築くことは可能であることが示されるのだが、逆の見方をすると、よい関係にある実の父子だからと言って、母親ほどには血の絆に確信を持つことができないという解釈も成り立つ。例えば、クリスの父は、愛していた妻に裏切られたのだから、二人の息子が本当に我が子なのかという疑いを持っていたとしても不思議はない。また、ヘレンの父も、結婚後、ダンス好きの妻にダンスホールに通うことを禁じたという経緯が明らかになるが、その理由は、妻の母親がナイトクラブのダンサーとの間に私生児を産んだという過去を鑑みて、その血を引く妻の行状に不安を覚えたためと考えるのが妥当であろう。Dear Nobodyにおける父親たちの影の薄さ、自信のなさは、このようなところに原因の一端があるように思われる。

男たちの父親としての自信のなさは、クリスの意識の中にも反映される。ヘレンが妊娠しても、クリスは自分が父親であると実感することができず、そのことによって、自分の将来の夢が崩れ去るのではないかと思うと、「小さな穴にうずくまるネズミ」(a mouse crouching in a tiny hole p.78)のような気分になり、生まれ変わったら、もっとうまくやらずとさえ思ってしまう。結局、クリスは父親になる覚悟ができていないことをヘレンに悟られ、二人の仲は破局に向かう。ここには、妊娠という現実から逃れられない女と、束縛を嫌う逃げ腰の男という典型的な図式が成り立ち、最初は、女ばかりが損をする極めて不公平な関係が印象づけられてしまう。だが、物語が進むにつれて、実はその逆、secret societyから閉め出されたのは男であるクリスの方なのだという事実が見えてくる。肉体的にリスクを負うこともなく、現実から目を背け、ただおろおろするばかりで何の役にも立たず、ヘレンから別離を言い渡されると、あっさりバカンスに出かけ、行きずりの女の子と浮かれ騒ぐ始末のクリスだが、すべては、妊娠によって、否応なく精神的成熟を遂げなければならなかったヘレンに追いつくことができず、一人取り残されてしまった結果であると言えるだろう。

無事、第一志望の大学への進学が決まり、喜んでくれる高校の教師に、恋人のヘレンが進学を諦めて子どもを産むこと、自分たちは別れたことをクリスが報告すると、その教師は驚いて、“Poor kid” (p.199) とつぶやく。それはヘレン、または生まれてくる赤ん坊に向けられた言葉だろうと思ったのに、教師の目が哀れみを込めて自分を見ていることに気づいて、クリスは愕然とする。クリスが薄々感じていたように、一番、哀れなのは、父親でありながら、ヘレンとその子どもから切り離され、部外者に追いやられたクリス自身であったのだ。

結局、クリスがNobodyを実在のものとして意識できるようになるのは、Nobodyがこの世に生まれ出た後のことだった。それも、ある意味、無理からぬことかもしれない。男と女の明白な身体構造の違いが、意識のずれともなっていて、軋轢が生じる。その軋轢を乗り越えるために必要なのは、お互いの心の内をすべてをさらけ出すことだという一つの解答が最後の最後に呈示されている。それはつまり、ヘレンがNobodyに宛てて書き綴った手紙をクリスに託すことであり、クリスが、生まれただけの娘エイミーに誕生をめぐると経緯を、すべて包み隠さず、正直に語る手紙を書き始めることなのである。我々読者が読んでいた物語が、まさに新しい命のために語られていたものだということが明かされる。すべてを語り合い、理解し合う努力を重ねていくことによって、彼らは秘密の共有者となり、新しい家族の絆が築かれるのである。

現代社会において、親子をめぐる問題、子どもを取り巻く状況はますます複雑化し、困難なものになりつつある。虐待を受けた子どもは、また、自らの子どもを虐待しやすいという「知識」を植え付けられた現代人は、自らの中に潜む怪物の影に怯える。子どもを産み、育てるといって、生物として当たり前な行為が、いつの間にか、恐怖の体験に変質してしまうのである。だが、やはり新しい命の誕生は美しい。否定されることから始まったNobodyが、思いがけず、壊れた家族の絆を繕う糸の役割を果たしたように、すべての新しい命は新しい可能性を運んできてくれる。Dear Nobodyの新しさは、若い世代に、「母」もまた、悩める「娘」であることに気づかせてくれる構造にある。自分の子どもを愛することは自分自身を愛することであり、また、自分の親を愛することでもある。生命の営みは、尽きることなく続いている。名前のないNobodyは、あらゆる人間の原点であり、その意味で、Dear Nobodyは、すべての人間に向けられた一つのメッセージなのである。

注

- (1) このテーマは、同じDohertyの*The Snake-Stone* (1995) において、さらにストレートな形で現れる。捨て子の少年ジェームズは、スネークストーンだけを形見として自分を捨てた母が、自分を本当に欲しいと思って産んだのかどうか知りたくて (But what I do think about is this -- did my mother want me? P.1), 出生の秘密を探る旅に出る。

Berlie Doherty, *The Snake-Stone*, New York: Puffin Books, 1998.

- (2) James Carter, *Talking Books: Children's authors talk about the craft, creativity and process of writing*, London, Routledge, 1999, p.153.
- (3) Berlie Doherty, *Dear Nobody*, New York: Beech Tree, 1994.
以下、本文中の引用はすべてこの版により、括弧内にページ数のみを記す。
- (4) *Dear Nobody*の中に、いわゆる理想的な母親像は見出せないと述べたが、子沢山で母性的タイプのルスリンの母親コラルだけは唯一の例外と言える。ただし、コラルはジャマイカ出身であり、話す英語もジャマイカナまりで、たどたどしいという設定になっており、そこには、優しくて包容力のある伝統的な「よき母親」のイメージが、イギリスの一般的な母親からは失われていることを強調しようとする著者Dohertyの意図が感じられる。
- (5) 見知らぬ親譲りの才能というモチーフは、Berlie Dohertyの作品の中に、繰り返し、現れる。ヘレンの母アリスのダンスの才能は、ナイトクラブのダンサーだった父親の血を受け継いでいる証として使われているし、また、*The Snake-Stone*でも、高飛び込みの選手である主人公ジェームズの産みの母が、橋の上から下の川へと水鳥のように飛び込むことができた設定されている。(See *The Snake-Stone*, p.37)
- (6) 岸田秀、『幻想に生きる親子たち』、東京：文藝春秋、2000、p.12.
- (7) 河合隼雄、「解説」『ディア ノーバディ』、バーリー・ドハティ、中川千尋訳、東京：新潮文庫、1994、p.293.